

梁思永氏の長逝

中央研究院考古研究所の副所長であつた梁思永氏が昨一九五四年の四月二日に北京で逝去された。氏は中国での新しい考古学の開拓者として、今世紀の東亜考古学の上に劃期的な殷代古墓群發掘調査を主裁、かがやかしい業績を挙げた学者であるので、その長逝が学界から痛惜される。

梁啓超の令息として一九〇四年に上海に生れ、日本で幼年時代を過した後、清華学校で新しい教育を受けて、一九二三年にその課程を終えた氏は、アメリカに赴きハーバード大学の研究院で、人類考古の学を修得した。時恰も瑞典のアンダーソン博士の史前彩陶文化の調査が一つの機縁となつて中国での此の新しい学問への関心が世界的に高まつていた際であつたので、滯米数年の間に當時行われていた山西省夏県西陰村の同種の史前遺跡の出土品の整理に従つて、成果を挙げた。かくて帰国後中国での考古学研究の中心機関として新たに發足した中央研究院歴史語言研究所の考古組に迎えられ、李濟氏と協力することに

なつたのである。氏の研究所での活動は先づ一九三〇年秋に熱河から黒龍省への調査旅行にはじまつて、昂々溪での史前遺跡の發掘を行つた。ついで山東城子崖の第二次の發掘作業を経て、やがて有名な河南省安陽の殷墟の發掘に主力を傾倒したのである。

殷墟の調査では、一九三〇年に同地後岡の新しい地区の發掘で、攪亂を受けない層序と土器との關係から、同地の史前に彩陶・黒陶・白陶の三つの土器様式に依る文化段階が考えられる一事相を指摘し、更に一九三四年から侯家莊の西北崗を中心とした殷墓群の發掘調査を担当、前後三期に亘り、十基の大墓をはじめ無慮千二百の古墓群の調査を行つて、大きな成果を挙げた。一九三六年には祁延需氏と山東省日照兩城鎮の黒陶遺跡の調査に従事し關係資料を豊富にしたのであつた。

然るに翌年不幸な日華事變が起つたので、研究機関と共に一部遺品を携えて長沙に移り、更に事變の拡大と共に桂林・昆明等と転々、極めて困難な研究生活をつづけることを余儀なくさせられた。元來蒲柳の質であつた氏は、この為に太平洋戦争がはじまつた一九四一年に肺を病んで、四川の南溪李莊でのな

がい療養生活に入つた。そして終戦の年重慶で大手術を受けたのである。翌年北京に歸つていよく侯家莊古墓群の調査報告の執筆を志したのであるが健康旧に復することなく、中共政府の成立の直後衆望を負うて科学院考古研究所の副所長に挙げられたが、遂にたたず、享年僅かに五十一歳で、云わばいたましい過般の大戦の犠牲者として其の短い生活を終つたのである。

梁氏は全くの学究肌の人であつて、滯米の研究の間、アメリカ・インディアン遺跡の發掘に加わつて、考古の学の実地に就いての面をも修得する所があり、帰国後、これを中国の所謂田野工作に実施して史前から殷代に亘る遺跡の調査を行い、先づ確実な基礎事實の闡明につとめ、然る後それ等に即した考察を試みたのであつた。「後岡發掘小記」と「小屯龍山与仰韶」とはそれを示す具体的な述作として注目される。殷墟の發掘工作は、そう云う氏の参加に依つて、当初の云わば遺物の収得から、全面的なそれ自体の開明への大きな転機をなしたとも云い得るであらう。氏が侯家莊の古墓群の發掘に於いて示した發掘調査者としての手腕は、西欧のその道の学者をも

超ゆるものであつた。殊にその攪乱された大墓の間から、黄土に印した木製の太鼓や、木棺、容器等の印影を丹念に検出、その復原を可能にした驚く可き作業の遂行は特筆せらる可きである。

氏はまた田野工作に従事する学徒として何よりも先づ、調査報告の公刊を第一義としていた。この事は一九二八年の秋ハーバード大学で強くも筆者にかたつた所であつて、爾後の調査を通じて、よく実践されたこと、その著述の示すが如くである。ただ不幸な戦乱に依つて、最も著しい侯家庄古墓群の調査の結果が、氏自からは僅かに一九三七年に行われた出土器の展覧の目録にその片鱗を示したのみで、遂にその手で纏められるに至らなかつたこと何人よりも氏自身深く責としたに相違ない。終戦の直後の病中筆者が戦時中南京で同所に遺留されていた関係遺物の調査に関与した事を知つて、上記木器類印影の復原写真の提供方を申し入れて来た。中共科学院考古研究所副院長就任後、病をおして、事に当つたことの伝えられるのは、その事と思ひ併されて、その長逝に対し氏を知る人を深くもいたましめるものである。

氏の人となりは、内に毅然たる所を蔵しながら、まことに長者の風があつた。そして學問に對しては國境を超えてその發達を熱願していた。排日思想の横溢していた一九三六年春、南京訪問の際、氏の示された學問上の好意は私の終世忘れ得ない所である。終りに著作目録を載せて、この優れた而も薄幸な考古學者の長逝を哀悼する。

主要著述目録

New Stone Age Pottery from the Prehistoric Site at Hsi-Yin Tsun, Shansi, China (Memoirs of the American Anthropological Association, No. 37, 1930)

Some Problems of Far Eastern archaeology, (American Anthropologist, New Series, Vol. 34, No. 3, 1932)

「崑崙溪史前遺址」(《歷史語言研究所集刊》四本一分 一九三三年)

「後岡發掘小記」(《安陽發掘報告》第四冊 一九三三年)

「小屯龍山与仰韶」(《慶祝蔡元培先生六十五歲論文集》下冊 一九三三年)

城子崖「建築之遺留」(吳金鼎共著『城子崖』所載 一九三六年)

城子崖「石骨角蚌及金屬製品」(同上)

城子崖「墓葬与人類獸類、鳥類之遺骨及介類之遺骸」(《城子崖》所載 一九三六年)

熱河不干廟林西雙井赤峯等處所採集之新石器時代石器与陶片」(《田野考古報告》第一冊 一九三六年)

龍山文化—中國文明的史前期之一 (《第六回太平洋學術會議會誌》第四冊 一九三九年及《考古學報》第七冊 一九五四年)

編 纂

『城子崖』(李濟・董作賓共編) 中國考古報告集第一種 (一九三四年)

『國立中央研究院參加教育部第二次全國展覽會出品目録』(一九三七年)

(梅原末治)

馬衡先生の訃

北京にあつて病氣の静養中ということであつた馬衡先生が、去る三月二十六日、ついに逝去された。享年七十四歳。現に北京文物整理委員會主任委員の職にあつた同氏のために、同月二十九日、盛大な公祭がいとなまれた。主祭は人民共和國文化部長沈雁冰、陪祭には沈鈞儒、邵力子、陳垣、朱啓鈴、鄒振鐸、夏鼎、郭宝鈞等の名がみえてゐる。

馬衡先生は字を叔平といい、浙江鄞県の人、小柄な体格であつたが、謹直そのもののごとき風格はいまなおわすれることができない。一九二三年、北京大学の教授となり、同大学研究所国学門の導師を兼ね、中国金石学の講義を担当された。その講義のプリントは、一部石刻の部が、かつて『東洋史研究』に収載されたことがある。金石のうちでも、とくに漢魏の石経はくわしく、専著もあるし、また一九二四年には洛陽朱圉村の石経出土地、つまり漢魏の太学遺址を踏査し、めづらしい文字瓦当なども採集してかえられたことがある。

また古代度量衡の研究にもふかく、「新嘉量」を考釋され、これにもとづいて「隋書律曆志十五等尺」の一書をあらわされた。一九二三年には、新鄭および孟津において青銅器の大量出土がつたえられたので、これが踏査をこころみられ、孟津の青銅車馬具は北京大学にもちかえられた。とにかく、ばら／＼の車馬具でなく、こうした一群の車馬具はめづらしかつたので、王国維とはかり車馬具の考定をされる予定であつたが、王国維の死によつてはたされなかつた。

一九二六年、わが浜田耕作、原田淑人先生たちが、東亜考古学会を結成されると、馬衡先生は呼応して北京大学考古学会を組織され、一九二七年、一九二八年にはわが国に来訪され、「中国之銅器時代」、あるいは「戈戟之研究」の研究を發表された。また一九二七年、東亜考古学会の魏子箇の発掘がおこなわれると、みづからこれに参加され、さらに一九二八年牧羊城の発掘には、その門下の莊嚴君を派して協力のをしめされた。ところが、一九三〇年には、みづから発掘団を組織し燕の下都発掘を遂行され、原田淑人先生をはじめわれ／＼にも参加見学の便宜をはかられた。なおとくに、われ／＼としてわすれることのできないのは、わが東亜考古学会の派遣学生、駒井和愛君をはじめ筆者たちの指導その他の面倒をみられたことである。また一九三三年、原田淑人先生は北京大学において講義されたが、これにも馬衡先生の斡旋があつたこととおもう。

平生、中国金石学の講義をつづけ、金石文字の学には、もとよりふかい研鑽をつまれたわけであるが、考古学的研究法の必要をつとに痛感され、これを金石の学問に導入するこ

とに意をもちいられた。さきにとべた発掘もそのあらわれであるが、たま／＼筆者の留学中にも中国大法院で唐の墓誌が発見され、すんでこれが発掘を計画され、筆者もこれに参加することができた。また、さきにあげた「中国之銅器時代」も、文献的資料を操作したものであるが、その観点はまづたく考古学的なものであつた。

一九三三年、故宮博物院院長となり、戦禍の波及するをおもんばかり、いちちはやく故宮の収蔵品を南にうつした。この功績は、中国において、いままなおたかく評価されている。一九五〇年の解放後も、北京にとどまり、前記の主任委員となられたが、高年のためひきこもりがちのようであつた。しかし、それにもかかわらず、漢魏石経の研究はつづけ、ある程度その稿本もできていらしい。馬衡先生は、中国の金石学者として泰西の考古学を導入することにとめられた、またそういう時代の人であつた。しかるに、先生の晩年、とくに中国の考古学はさかになり、解放後もさらに盛大をきわめつつあるのは、先生においてはたして、いかなる感慨をもたれたであらうか。いま先生を偲びつつ、その

業績の一部を以下にしたい。

石鼓為秦刻石考『国学季刊』第一卷 一期

一九五三年刊

漢熹平石經論語魏曰篇殘字跋『国学季刊』

第一卷 三期 一九五三年刊

新鄭古物出土調査記『東方雜誌』第二二

卷二期 一九二五年刊

孟津出土古器物紀事

隋書律曆志十五等尺 一冊（一九二七年刊）

集拓新漢魏石經殘字 四冊（一九二七年刊）

中国之銅器時代『北大国学月刊』第一卷

六期 および『考古学論从』第一冊 一

九二八年刊

戈戟之研究『燕京学报』第五冊および『考

古学論从』第二冊一九二九年、一九三〇

年刊

記漢「居延筆」『国学季刊』第三卷 一期

一九三二年刊

従実験上窺見漢石經之一班（『慶祝蔡先生

論文集』上冊 一九三三年刊）

新嘉量考釋『故宮博物院年刊』一九三六年刊

宋范祖禹書古文孝經石刻校釈『歴史語言研

究所集刊』第二〇本 一九四八年刊

（水野清一）

岡山大学助教授三吉希氏記

岡山大学助教授三吉希氏は、去る六月二十
六日萎縮腎で逝去された。氏は昭和二十一年
九月京都大学を卒業後、特別研究生として研
究に精進され、一時郷里高知県宿毛・中村両高
校に教鞭を執られたが、二十七年一月国史研
究室助手として再び京大に帰任された。氏が
助手として研究室運営の劇務に当られた期間
は、内外の状勢多難を極め氏の費された心労
も一方ならぬものがあつた。傍ら本会庶務委
員として例会運営その他の実務に心肝を砕か
れ、会の急速な発展に寄与される処少くな
つた。その温厚、而も泰然たる風格は周囲の
挙げて仰慕する処であり、二十八年十二月岡
山大学に赴任後も、各方面の尊敬を集められ、
また死の直前迄学生を指導されたと承り、嚴
肅襟を正さしめるものを覚える。

不幸三十四才にして夭折された氏には、
「佐藤直方の学問論」（本誌三六ノ一）をは
じめ、専攻の近世思想史、特に儒学史に関す
る論稿があるが、その何れも氏の温かく、し
かも真摯な人間追求の態度を窺うに足るもの
である。

幸いにして家庭も持たれ、岡山に落着かれ、

今後の活躍を最も期待された人であつただけ
に、哀傷は一入であるが、今は氏の御冥福を
祈り、併せて御遺族の御多祥を念願するばか
りである。

（上横手雅敬）

執筆者紹介

米田賢次郎	京都大学助手
小葉田 淳	京都大学教授
荒木 敏一	京都学芸大学教授
池内 義資	今治高校教諭
川端 眞治	京都大学大学院学生
金 関 恕	京都大学大学院 特別研究生
富沢 靈岸	島根大学講師
村井 康彦	京都大学大学院学生
大島 襄二	同志社高校教諭
石田 善人	京都大学大学院 特別研究生

学界消息

史学研究会関係

史学研究会例会 六月四日(土) 午後一時

京大文学部第八教室

物庄制の歴史的意義

石田 善人

地方都市と農業

渡辺 久雄

ビルトダウン人問題について

有光 教一

国史関係

読史会例会 五月二八日(土) 午後一時

京大史学科演習室

防人考—東国と西国

岸 俊男

明治初期大阪周辺における商品生産と

高尾 一彦

大谷史学会大会 六月四日(土) 午後一時

大谷大学四一教室

中国の石仏について

水野 清一

紀州花園村大般若経の書写と流传

五来 重

日本史研究会春季講演会 六月一八日(土)

午後一時

立命大文学部

戦後十年の歴史学の歩み

北山 茂夫

経済学教科書と歴史学

岩井 忠熊

大阪歴史学会春季大会 六月二六日(日)

午前九時 関西大大学院

封建崩壊期における農民闘争

鷺見 等 曜

小林 茂 曜

角山 榮 曜

井上 薫 曜

岸 俊男 曜

東大寺をめぐる政治情勢

東洋史関係

西藏学会 五月二一日(土) 午後二時

京大史学科演習室

アムド方言について

西田 龍雄

西洋史関係

西洋史読書会例会 六月二九日(水)

京大史学科第二教室

R. Rolland, Journal des annés de la

Guerre (1914—1919)

高田 彬臣

H. Thode, Michelangelo und die Ende

der Renaissance

谷

泰

地理学関係

人文地理学会第十二回例会 六月廿五日(土)

京大附属図書館

市場連鎖とC.B.D(中央業務地区)

の限界について

樋口 節夫

紀ノ川河岸における古墳の位置につい

ての考察 近藤 忠

考古学関係

京都府竹野郡網野町小浜海浜縄文遺蹟の調査

網野町教育委員会の委嘱により、六月廿四

日より三日間、京大考古学教室より樋口隆

康講師が同地に赴き、海浜砂丘下に埋没せ

る縄文式前期末の土器の包含層を検出し

た。

史学研究会例会

日時 十月一日(土) 午後一時

場所 京都大学楽友会館(市電近衛通下車)

水力エネルギーに関する歴史地理

日本における封建化の過程について

清代淮南塩販路の争奪について

末尾 至行

黒田 俊雄

佐伯 富